



南国から来たチョウ

今回『常陸大宮市史 別編2 自然』にまとめた、常陸大宮市の昆虫は、20目・220科・1,605種となりました。さらに調査を続ければ3,000種を超えたいと思います。しかし、何種類挙げても終わりではありません。昆虫は常に出入りし、変化しています。特に近年、温暖化等の影響により、南方系種の進出が目立っています。

蝶類でいえば、ナガサキアゲハ、ムラサキツバメ、ツマグロヒョウモン、クロコノマチョウなどです。これらは2000年までは関東地方に、ほとんど定着地点はありませんでした。

ツマグロヒョウモンとクロコノマチョウは、2000年代以前にも何回か台風などで運ばれた“迷蝶”^{めいちよう}として市内でも記録されていますが、ナガサキアゲハとムラサキツバメは、そのような記録もなく、進出してきました。30年前でしたらこれらのチョウの生息地は和歌山県以南でした。常陸大宮市の蝶に入ることは予想すらできませんでした。しかし、現在ではツマグロヒョウモンやナガサキアゲハは市内各地で普通にみられるようになりました。

この後もどのような種が来るか楽しみですが、あまりにも急な変化は心配でもあります。

また南方系の蝶ではありませんが、市内に入り込んだ種もいます。ウスバアゲハです。茨城県では2014年に栃木県から進入したと考えられるのが八溝山で確認され、その後、常陸太田市や北茨城市などの県北山地に分布を広げました。市に接する栃木県那珂川町にも分布していましたので、市内にも拡大してくると考えていました。予想通り2019年に市内の小田野で確認することができました。今回の市史調査で市内初確認となった蝶

自然部会 専門調査員
茨城県生物多様性センター
佐々木 泰弘



です。2022年にも市内の千田や尺丈山で確認されました。分布拡大が進んでいます。大宮地域や山方地域でも見られるようになるかもしれません。5月に現れる半透明の白い羽の優雅なアゲハチョウです。皆さんも探してください。

このように昆虫類はいろいろな種類がやってきたり消えたりしています。それを調べ続けることが、その地域の環境変化を見ていくことにつながります。身近な記録を残しておくことが大切です。

| 目 | 科数 | 種数 |
|-------------|-----|------|
| 1 カゲロウ目 | 6 | 26 |
| 2 トンボ目 | 12 | 53 |
| 3 カワゲラ目 | 7 | 32 |
| 4 ゴキブリ目 | 2 | 3 |
| 5 カマキリ目 | 1 | 4 |
| 6 シロアリ目 | 1 | 1 |
| 7 バッタ目 | 11 | 46 |
| 8 ナナフシ目 | 1 | 2 |
| 9 ガロアムシ目 | 1 | 1 |
| 10 カメムシ目 | 34 | 86 |
| 11 アミメカゲロウ目 | 3 | 6 |
| 12 ラクダムシ目 | 1 | 1 |
| 13 ヘビトンボ目 | 1 | 2 |
| 14 コウチュウ目 | 58 | 489 |
| 15 ハチ目 | 14 | 62 |
| 16 シリアゲムシ目 | 1 | 2 |
| 17 ノミ目 | 1 | 1 |
| 18 ハエ目 | 3 | 5 |
| 19 トビケラ目 | 24 | 100 |
| 20 チョウ目 | 38 | 683 |
| 計 | 220 | 1605 |

▲今回の調査で確認できた昆虫 (2022年3月現在)

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化振興グループ
電話:52-1111(内線343)



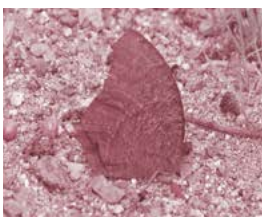
ナガサキアゲハ



ムラサキツバメ



ツマグロヒョウモン



クロコノマチョウ



ウスバアゲハ

三美地区で確認された 縄文時代草創期の陥し穴

今から約1万4千年前の縄文時代草創期、日光の男体山が二度にわたって噴火し、噴出した軽石が偏西風に乗って栃木県の中部から茨城県の北部にかけて降下しました。1回目の噴火の軽石が赤褐色の今市軽石、2回目のものが黄色の七本桜軽石で、黒土層と関東ローム層の間に堆積していることから、旧石器時代と縄文時代を分ける鍵層となっています。通常、縄文時代の遺構は、黄色のローム面で黒土の落ち込みとして確認されますが、両軽石の降下地帯では、草創期の遺構に限り赤や黄色の軽石の落ち込みとして確認されるのが特徴です。

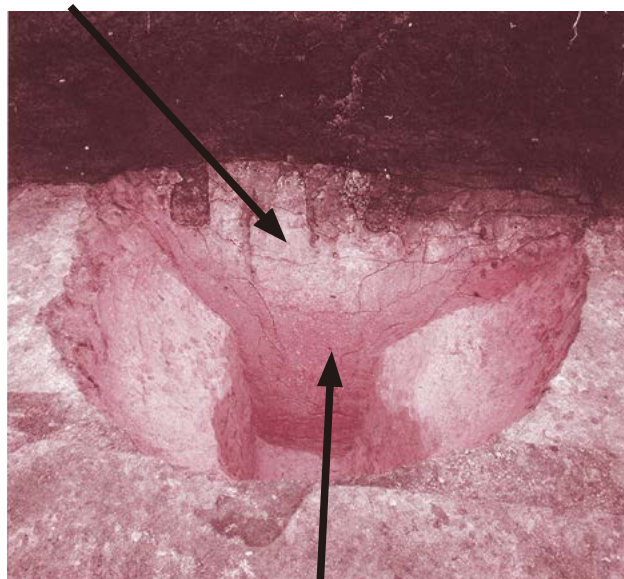
このような軽石を覆土(埋め土)とする陥し穴が初めて確認されたのは、1995年の茂木町の登谷遺跡の調査で、草創期の陥し穴には、楕円型と溝型の2種類があることがわかりました。楕円型は、長さ・深さともに1m強の楕円形の陥し穴で、谷底に集中して配置されることから、主にイノシシを狙ったものと推定しました。溝型は、長さ3m、深さ1m程の溝状の陥し穴です。落ちた獲物が挟まって動けなくなる仕組みのもので、その形や配置状況から、シカを狙ったものと推定しました。

三美地区の那珂川左岸の河岸段丘上では、近年の調査により滝ノ上遺跡と中崎遺跡で縄文草創期の楕円型陥し穴が確認されています。写真1は、中崎遺跡のSK172とした陥し穴の覆土の断面です。下半部には赤褐色の今市軽石を主体とする土、上半部には黄色の七本桜軽石が堆積しており、その上を黒土の自然堆積層が覆っていることから、黒土が形成される以前に埋没していた状況がわかります。写真2は、SK188の完掘状況です。長さ・深さともに1m強で、底部中央に穴が確認されました。この穴には、獲物を殺傷するために逆茂木を立てる場合と、獲物の動きを封じて生け捕りにするために束ねた篠竹をササラ状に立てる場合があり、縄文時代では後者が主流でした。縄文草創期の陥し穴は全国的にみても少なく、両軽石の降下地帯は、それが明瞭な形で確認できる数少ない地域なのです。

考古部会 協力員
茂木町教育委員会
埋蔵文化財専門員
中村 信博

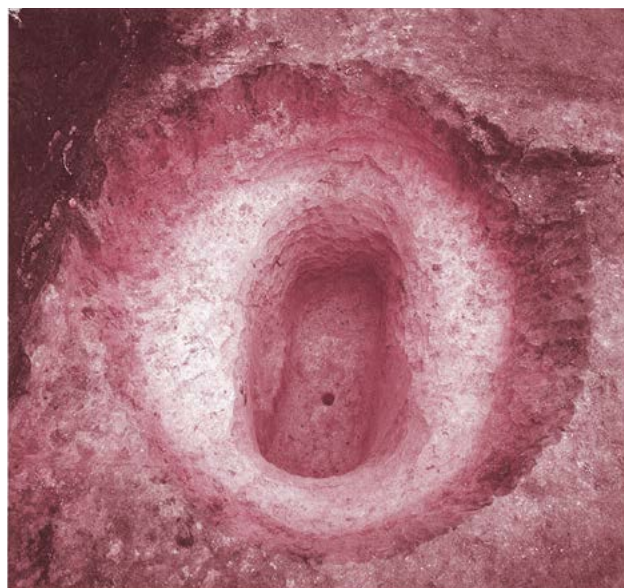


七本桜軽石



今市軽石

▲写真1：中崎遺跡 SK172 断面



▲写真2：中崎遺跡 SK188 完掘状況

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化振興グループ
電話:52-1111(内線343)

「本橋次左衛門家」のその後…

地租改正期の民衆一揆「小瀬一揆」、この一揆に参加した本橋次左衛門(小舟村)は、明治11年(1878)8月12日に、首謀者の一人として死刑(斬罪)に処されます。後年に「義民」として顕彰される人物ですが、この処刑は当時どのように受け止められたのでしょうか、そして、次左衛門家はその後、どうなったのでしょうか。

彼の処刑の数日後(8月16日)に、小舟村が含まれる第四大区五小区の副区長であった大武重信おおたけしげのぶから本橋甚蔵じんぞう(本橋家の本家、当時小舟村長)宛に「至急用事」と書かれた手紙が届きます。(写真参照)

そこには、処刑された次左衛門の「死骸」の「葬祭」をどのようにするかについて、大武が苦悩している状況が垣間見えます。当時の職務として、村長は副区長の下に属するので、手紙には「御年内おとしないにて御取計おとりはからひ可被成候也なされるべくせうろうなり」とあり、行政上、急いで処理を願う旨を述べる一方で「御処刑ごしょけいニ相成候人物おにたりニ候故私義ごうごも甚ダ心配」と、処刑された親族を気遣う心境も吐露しています。これらの相談事は、「御内々ごないない」のもので「他見ヲ禁スたけん きん」のものであったためか、他に関係書類が確認できず、この後の経過は不明です。

本橋 甚蔵

近現代史部会 協力員
飯塚 彬
(国文学研究資料館)



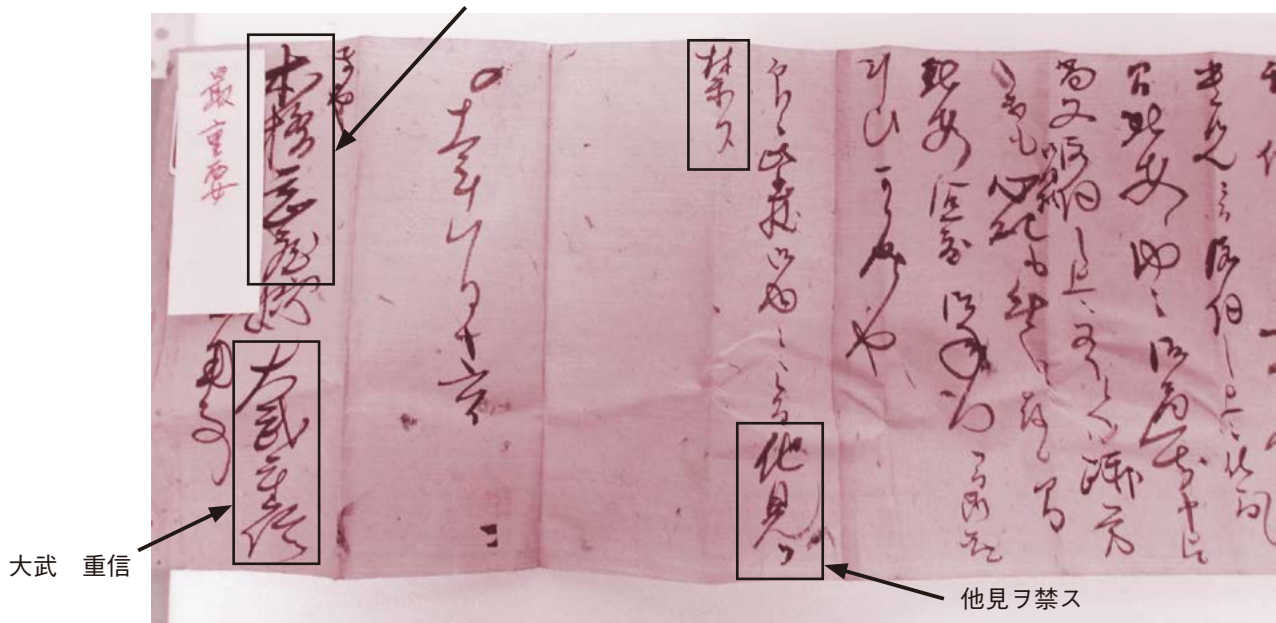
ただ、この手紙が平成9年(1997)の「緒川村史料調査収集専門委員会」の調査によって発掘され、「最重要」史料として位置付けられて現在にまで残っているのは、いかに地域にとって、これらの事実が重要であったのかを示しています。

なお、別の史料によるとその後、次左衛門家は長男である「初太郎」(農民)が処刑された父にかわって「戸主」となるように「戸籍之面御書替こせきのめん おかきかえ」の願いを、茨城県令宛に申請しています(明治11年10月「戸主御書替之儀願こしゅ おかきかえの ぎねがひ」小舟区有文書190、常陸大宮市文書館所蔵)。

一揆への関心は市域でいまだ高いと思われませんが、市史では出来る限り残存の史料に即して地域への多様な影響を分析していきたいと考えておりますので、ご協力のほどよろしくお願いいたします。

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化振興グループ
電話:52-1111(内線343)



▲本橋甚蔵宛大武重信書簡(小舟区有文書1322、常陸大宮市文書館所蔵)
緒川村史料調査収集専門委員会により「最重要」の付箋が貼られ、現在まで残っている。



新種となった生き物・両生類

『常陸大宮市史 別編2 自然』が発刊された2022年、この年の7月と8月に市内に生息する2種類の両生類に新種がいることが、調査を進めてきた各研究グループからそれぞれ発表されました。今回、この2種の生き物についてご紹介します。

・イワキサンショウウオ(市史でトウキョウサンショウウオとされていたもの)

市内の丘陵地や山地には、「ヤマドジョウ」などと呼ばれる「サンショウウオ」が生息しています。春先の水辺でバナナ型の卵がみられることもあります。これが、今回新種とされた「イワキサンショウウオ」です。関東地方と福島県の一部に生息するトウキョウサンショウウオとされていたもので、近年、福島県と茨城県、栃木県東部の個体(北側のグループ)は、栃木県西部や埼玉、千葉、東京、神奈川の各県の個体(南側のグループ)のものとは「遺伝的に異なっている」ことから研究が進められてきました。また、「手足の付け根の間の長さ」など、体のつくりの一部で差が見られる傾向があり、2022年7月に本市を含む「北側のグループ」が新種とされ、研究で採集された福島県いわき市の個体をもとに「イワキサンショウウオ」という名前がつけました。

イワキサンショウウオは、トウキョウサンショウウオとともに開発等による生息環境の悪化や外来種の影響、乱獲により激減しており、「種の保存法」という法律によって販売目的の採集や販売が禁止されています。



▲イワキサンショウウオと卵囊(たまご)

自然部会
専門調査員
稲葉 修



・ムカシツチガエル(市史でツチガエルとされていたもの)

市内では、「イボガエル」とも呼ばれているカエルです。本州、四国、九州などに分布するツチガエルのうち、東北地方の太平洋側から関東(本市を含む)・中部の一部にかけて分布する個体は、他地域のツチガエルとは遺伝的に異なり、分布境界域での雑種もみられないことから、2022年8月に新種とされました。ツチガエルよりも古い時代に中国など大陸産の良く似たカエルから(種が)分かれたと考えられています。オタマジャクシの段階では、よく似たツチガエルと比べ、お腹にある白い点のような「腺(細胞の組織のひとつ)」の数が少ないとされますが、判別は難しく、大人のカエルでも外見上の区別はつきません。昔ながらの田んぼや素掘り水路に多いのですが、開発や圃場整備によって減少しています。

身近な生物でも、詳しく調べていくと、まだまだわからないことがたくさんあります。市史を参考に、家の近くの生き物を観察してみませんか。

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化振興グループ
電話:52-1111(内線343)



▲ムカシツチガエル



「部垂の乱」シンポジウムと ヒストリーツアーを開催

『常陸大宮市史 資料編2 古代・中世』の刊行を記念し、シンポジウム「部垂の乱を^{へたれ}考える」、ヒストリーツアー「部垂の乱を歩く」を開催しました。

「部垂の乱」とは、戦国時代に市内下町にあった中世城郭 部垂城跡(現大宮小学校)や周辺の城が戦乱の舞台となった佐竹氏一族の内紛で、これにより部垂城は佐竹本家に攻め落とされ、江戸時代を待たずに廃城となりました。明治時代以後は、大宮尋常^{じんじょう}高等小学校や実践女学校の敷地となり、土塁や堀など、城の痕跡はほとんど失われたと思われていましたが、このたび刊行された『常陸大宮市史 資料編2』では、現在の城跡や古文書から、部垂城のかつての姿と部垂の乱の実像について、新たな視点を提示しています。

5月13日に開催した刊行記念シンポジウムでは、編さんを担当した古代・中世史部会の専門調査員である佐々木倫朗氏が「部垂の乱の歴史的意義」と題した基調講演を行い、それぞれの専門分野から4人の講師が部垂の乱についての報告を行いました。また、後半のパネルディスカッションでは、来場者から多くの質問が寄せられ、地域の歴史への関心の高さがうかがわれました。



▲佐々木倫朗氏による記念講演



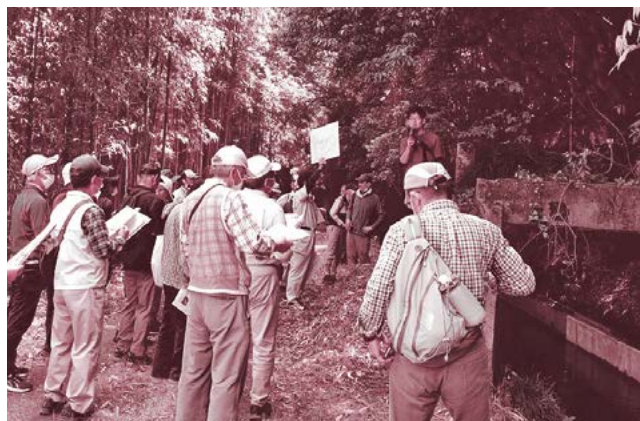
▲刊行記念シンポジウムでのパネルディスカッション

続く5月27日(土)には、部垂の乱の最終決戦地となった部垂城跡を最新の研究をもとに紹介し、歩いて見学するヒストリーツアーを開催しました。これまで知られていなかった部垂城の遺構や周辺城郭との関連など、専門家の解説を聞きながら見学し、部垂の乱の痕跡やその伝承について理解を深めました。

今後も、市史編さん事業として、常陸大宮市の歴史を学び、紐解くイベントを開催しますので、ご興味のある方はぜひご参加ください。



▲ヒストリーツアーでは、部垂城跡に現存する土塁や堀、部垂義元の顕彰碑などについて解説を聞きながら見学しました。



▲部垂城の北側の岩崎用水沿いからも城跡の遺構を見学。これまで知られていなかった部垂城の姿を確認することができました。

■問い合わせ■

文化スポーツ課 文化振興グループ
電話:52-1111(内線343)